

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2006.12) 7巻1号:91~92.

第26回日本静脈学会

笹嶋唯博

学界の動向

第26回日本静脈学会

笹 嶋 唯 博*

この6月15-16日(2006)、旭川グランドホテルで第26回日本静脈学会を開催させていただきました。全国からおおよそ300人の参加を得、盛会裏に会が終了致しました。まずご支援をいただきました方々に深く御礼申し上げますと共に、その概略を紹介させていただきます。

学会の概要

まず学会の学術企画の概要について紹介させていただきます。静脈疾患と言えば静脈瘤と深部静脈血栓症、肺塞栓症で話題が尽きてしまいますことからテーマは設けませんでした。しかし、これら疾患に対し医療従事者・病院や一般人への多方面からの啓発活動が年々急速に高まっており、またそれらに対する新しい治療法の導入や急速な予防対策の進歩などが加わって、昨年にもましてこれら疾患に対する注目が集まりました。医療事故の側面からは術中の深部静脈血栓症予防が麻酔科を中心に各病院とも推進されているところからも伺えます。今回、約300人のご参加を頂きましたが、これは本学会としては十分な参会者数であり、旭山動物園の力を借りずに済んだことは本学会にとって明るい見通しでした。エコノミー症候群で有名になった深部静脈血栓症が内科、整形外科、麻酔科など外科以外の多くの分野で関心が持たれるようになり、また内科医でも実施可能なカテーテル治療が普及し始めていることなどの反映と思われまます。特別講演、招請講演、招待ランチョンセミナーなどは8題で、静脈疾患の歴史(田辺達三北大名誉教授)、バッドキアリー症候群の根治的手術(琉球大学古謝 景春名誉教授)、静脈瘤に対するマイクロウエーブ治療やレーザー治療、新しい血栓治療薬などの講演が行われました。静脈瘤に対

するレーザー治療は当教室を含めて国内3施設で装置の臨床治験が進められほぼ終了しつつありますが、今回、特別講演を釜山大学皮膚科 Oh 教授にお願いいたしました。韓国では既に多くの臨床治療例があります。台北大学病院では既に300例以上の心臓移植手術を実施していますが、日本の先進医療は文科省や厚生労働省が推進を唱えている現状とは裏腹に手術のデバイスや薬品の認可が滞り医療後進国に成り下がっています。米国からの特別講演者はオレゴン大学病院(ポートランド市)血管外科のモネタ教授をお招きしました。ポートランドは札幌の姉妹都市で、コロンビア川の辺にあり、シアトルとサンフランシスコの中間にある小都市です。しかし医療施設としては周辺200万人を対象人口とすることから小都市ながら症例数が多く、血管外科医療レベルは米国屈指です。田舎でも国内一の血管外科症例数を誇る我々旭川医大と同じ境遇を感じます。彼の家はポートランド郊外で森の中の閑静な住宅地にあり、昨年訪問した時はコロンビア川のサーモンを自ら焼いてもてなしてくれました。温暖化の影響で米国ではシアトルやポートランドにおける住宅の値段が急速に上昇していますが、森を利用し、樹木を温存して巧みに住宅地が造成されています。宅地は500-1000坪が標準で大きいのですが、旭川にもそのような造成の発想が欲しいものです。モネタ教授のご講演は最新の静脈疾患診療の実際と米国の現状をご紹介頂きましたが、豊富な知識と経験で特別企画の国際セッションももり立ててくれました。シンポ、パネルは4題で、静脈疾患の新しい診断法、治療法などの評価について使用経験に基づいた有用性の評価が討論されました。国際セッションは10題で、米国およびアジア4カ国から20名の参加を得ました。

*旭川医大 第一外科

日本では静脈疾患は血管外科領域の小領域ですが、白人には頻度、重症度の点でも重大な病気で、血管外科医以外に皮膚科医や多くの静脈専門医 (phlebologist) がいます。来年は国際静脈学会が20年ぶりに日本(京都)で開催されますが、欧米から多くの phlebologists の参加が見込まれています。

学会の舞台裏

東洋人は静脈が丈夫なためか重症例が少なく、血管外科医が熱心に診療しない傾向にあります。そのため日本静脈学会は歴史がありますが、会員数が少ないことから日本製薬業協会の支援対象にならず、運営は楽ではありません。それでも今回は内、外の多くの方々のご支援、ご協力により十分内容のあるものに仕上がったと思っております。学会はその学問的な内容もさることながら、開催地の快適さや娯楽面の評価も重要で、参会者の興味をそそります。そこで旭川に対する来賓や学会会員の評価や学術以外の企画に関するお話しをします。会場の旭川グランドホテルはエジソン氏がコーディネートしただけあって学会会場としては好評です。値段の安いクリスタルホールも使ってみたところですが、交通・立地条件の悪さに加えて、融通性のない公的運営姿勢で、まったく使い物になりません。観光地としての評価は食事も含めて極めて良好で、ゴルフは当然人気ですが、最近では旭山動物園に来たいので参加する会員が少なくないようです。悩ましいのは会長招宴や懇親会などの会場です。ホテルで行われる懇親会は国内・外とも飽きられていますが、ヨーロッパの国際学会では、数年前のダブリンでは古い王城やギネスビールの工場、インスブルックではマリアテレジアの別荘となった宮殿、ヘルシンキでは湖

畔のレストラン、プラハでは河畔の宮殿など、日本では一般人が足を踏み込めそうにないところが国際学会の懇親会場として提供され、その町の国際評価を高めるのに役立てられています。その土地の特徴が披露される学会懇親会は遊びではすまされない国際交流の場なのです。この6月末に国際脈管学会がリスボンでありましたが、その時の懇親会は大きな城の中にあるレストランの庭園を使用し、リスボン大学の医学生が演奏する郷土音楽を聴きながら会が始まるという趣向でした。国際学会がおおよそそうであるように、全国からはるばる来旭される会員は学問と娯楽の両面が満たされてこそ開催地のすばらしさを評価します。旭川らしい何かをと考えますと自然を楽しんで頂くしかありませんが、旭川にそのような企画の対象となる施設が無いのは残念です。海外のそのような施設をみると、歴史のない旭川は自然を生かした施設があっても良いのではないかといつも思われます。昨年日本血管外科学会ではユーカラ会館の庭をお借りし評議員・招待者懇親会を行い、自然の中で“旭川の6月”の夕暮れを満喫していただきましたが、今回は美瑛町のご厚意で十勝岳インフォメーションセンターの庭園を使わせて頂きました。にわか雨に出くわしましたが、内外の招待者を含め会員いずれもが大変楽しんで頂けたように思います。多くの参加者がいずれについても未だに話題にして頂けることは開催の甲斐があります。今後も、いろいろな分野で全国規模の集会が開催されるものと思われませんが、会の目的と同様に懇親会は重要な交流の場であり、市の行政の方々にそのような視点から旭川市の改革を進めて頂きたいものと思われる次第です。